

言語としての 「声」の力を 研究する

国際コミュニケーション学部
日本語学科教授
王 伸子



おう のぶこ

専門は日本語教育、日本語音声教育。筑波大学大学院修了後、名古屋大学非常勤講師等を経て、1991年、専修大学に着任。現在、国際コミュニケーション学部日本語学科で日本語学専門科目、日本語教員養成課程、および全学の留学生の日本語科目を担当。2014～2015年、カナダのニューブランズウィック州マウントアリソン大学で客員研究員。

↑ 神田キャンパス 2 号館にて

私は現在、神田キャンパスの国際コミュニケーション学部日本語学科、および全学部の留学生日本語科目、そして大学院文学研究科日本語日本文学専攻で日本語教育分野と音声学の分野を担当しています。日本語学科は生田の文学部の一学科でしたが、新学部である国際コミュニケーション学部創設と同時に、神田に移転しました。

専門とする研究領域は、日本語教育およびその音声教育分野です。それについて文部科学省の科学研究費助成事業資金、「科研費」に採択されている私の研究を紹介します。研究課題は、「声」の力、発信力をどのように日本語教育に活用するかということで、一連の研究課題で、2017年より現在まで幸いにも3回にわたって競争的研究資金である科研費を獲得できました。声や発信に関する研究は、文献だけでなく、録音や分析に必要なマイクや機器、声の提供者に対する謝金など研究資金が必要となります。研究の具体的内容は、声による発信力を言語教育に取り入れ、自分の声をコントロールする力や発信力を高めるための研究と教材開発です。また、それに関するワークショップも、日本語教師を対象にして、これまで日本国内だけでなく、香港、カナダ、シンガポールなど海外でも10回ほど実施してきました。途中、コロナ禍があったため、発信はオンラインに変更したこともありました。

「日本語教育」とは

日本語教育とは、日本の公教育でおこなわれる「国語」科目とは異なり、日本語を外国語として学ぶという、外国語教育の一部門です。日本国内では留学生に教えることが多く、海外では、小学校から大学までの教育機関や日本語学校、北米・南米などの日系人教育、それに、祖父母や親が日本人である児童の継承語教育などがその対象となります。その日本語教育の分野で、どのように音声の力が活用できるかということ、私は研究しています。また国内では2024年度から文部科学省に所管が移り、「登録日本語教員」という国家資格ができました。本学日本語学科でもその資格が取れる課程を設置しています。

「声」による発信

外国語教育では、これまで文法や発音など、言語の仕組みや規則を学ぶということに力が注がれ、どのくらい知識があるのかを測るテストによって、レベルを知る手立てとしてきました。しかし、言語は学ぶだけが目的ではなく、使ってこそ、おもしろさもわかります。また、どれだけ知識があっても、実際の社会で使えなければ、



↑シンガポールでの「日本語学応用実習」



↑シンガポール国立大学、ウォーカー泉教授と



↑バンクーバーでの「日本語教育実習 C」

「教室だけの学習」に終わってしまいます。そこで、実際に使えることを目標として、その達成度をみるという方針で、日本語教育はおこなわれています。その一つが、自分の声で発信できる、ということです。相手とコミュニケーションを取るために、自分がどのような声で発信しているのかということを知って確かめるということも大切な手続きです。自分の声を録音して聞くということも、必要でしょう。さらに、自分が目標とする「声」を目指して、声をコントロールする練習も必要となります。

しかし、声をコントロールするというのが、案外、難しいことになっているのではないかと思います。本でも書類でもよいのですが、声に出して読むことが少なくなっているのではないのでしょうか。コロナ禍を挟んで、対面で発言する機会が減っているということもありますが、長い歴史の中で見ていくと、実は、明治時代はじめまでは文字を「音読」することが普通でした。しかし、図書館が普及したこともあり、「黙読」が主流となってきたのです。ヨーロッパなどでも同様に、読むという行動が音読から黙読に移って来たことが先行研究でわかっています。頭の中で読むことも重要ですが、声に出して読むことも、理解を進めるためには重要であることは認知心理学の分野で明らかにされています。そこで、そうした「声」のコントロールや、自分の意見を如何に発信するかということを、言語教育に取り入れて教材を開発していくことに、私は現在、取り組んでいます。

日本語教育、外国語教育のこれから

日本における言語教育は現在、大きな曲がり角にきていると言われています。それは、文法項目や語の意味などを「理解する」ことから、目標達成のために「使える」ことに到達目標をシフトし、覚えた量を測ることから達成度を測ることに、着眼点が変わってきているからです。もちろん、達成するためには、覚えて理解することが必要ですが、理解することが最終目標ではないということです。これには、CEFR

(Common European Framework of Reference for Languages= ヨーロッパ言語共通参照枠)を言語教育の指針と評価に利用することが大きく関係しています。日本語教育では、さらにそれに準拠した「日本語教育の参照枠」が作成されています。これは、言語を学ぶとは、社会の一員として言語を使用し、ある行動を達成するためであるという考え方に基づいています。また、複言語複文化ということも大切にして学びを進めていくということも加えられています。

専修大学国際コミュニケーション学部では

日本語学科では、これを取り入れ、「日本語が社会でどのように活用されるのか」ということを知るために、協力講座制度を取り入れ、話すことのプロフェッショナルであるナレーター、アナウンサー、声優、俳優、新聞記者、校閲者などを講師とする「日本語表現論Ⅰ、Ⅱ」「メディア日本語論Ⅰ、Ⅱ」という正規授業を設置しています。また、海外の大学と、オンラインで、または訪問して学習する「日本語学応用実習」科目を設置し、オンラインではクロアチアのユライ・ドブリラ大学プーラと、渡航による実習は、シンガポール国立大学の教授、学生と活動しています。私もいくつかの科目を担当しており、研究だけにとどまらず、こうした学部学科の活動にも、研究結果を活かしていける教育を続けたいと考えています。